

## 第 15 番学校における一校一国運動

### 1. はじめに

視察第 3 日目の 3 月 12 日(水)、ソチ駅から北へ 3km ほどに位置する「第 15 番学校(ギムナジウム)」を訪れた。『信濃毎日新聞』(2014 年 1 月 25 日版)を手掛かりとして、同校で日本をテーマとした一校一国運動が展開されていることを知り、メール上での交渉を経て訪問が実現した。全校生徒 1100 名程度(全 11 学年)を抱える大規模な学校で、我々は当初の想像を超える多様な取り組みを目の当たりにし、生徒たちによる「おもてなし」を受けた。



第 15 番学校正門 (同行者：根本文雄氏撮影)

### 2. ラリーサ校長による概要説明

予定通り 12 時に学校に到着すると、歓迎のダンスで生徒たちが迎えてくれた。応接室に通され、ラリーサ校長による一校一国運動の概要に関する以下の説明があった。



ラリーサ校長 (同行者：根本文雄氏撮影)

- ・ 2012 年 4 月より、一校一国運動としての日本に関する学習が始まった。
- ・ 特に、夏休みのサマーキャンプを活用した親子参加型のイベントを充実させた。
- ・ 初期段階では、折り紙、てまりの作成を主に行った。
- ・ The Word of the Day というプロジェクトでは、英語で日本に関する単語を学習した。
- ・ 10 minutes in Japan というプロジェクトも行われた。
- ・ 村尾真美という日本人が出した、縄跳びのギネス記録に挑戦した。
- ・ 副市長や、市の教育文化課と協力して各事業を行った。
- ・ 児童・生徒たちは、300 種類以上の日本に関する冊子(プレゼンテーション)を作成した。
- ・ 課外の特別活動としてだけでなく、正課にも一校一国運動のプログラムが盛り込んだ。
- ・ 多様なプログラムの中には、江戸時代の数学に関する調べ学習、日本文化に関する漫画づくりという特徴的なものもあった。
- ・ プログラムを推進する上で、親の理解は最大の助けであった。
- ・ 同校教員のうち 30 パーセントは、大会ボランティアスタッフとして活躍している。

### 3. 授業参観

校長先生による概要説明の後、校内見学を兼ねて一校一国運動の一環として行われていた各授業を視察した。茶道や生け花、折り紙や手毬といった日本文化に触れるものから、松下電器などをトピックとした日本の高度経済成長に関するディスカッション形式の授業が行われていた。また、文学の授業では松尾芭蕉が教科書の一項に登場し、生徒はロシア語で独自の俳句を詠んでいた。さらに柔道では、調査に参加した根本教諭(附属大塚特別支援学校)が同校の生徒と柔道乱取りを行い、交流を行った。



日本文化に関する会合のロールプレイング



教科書に載る松尾芭蕉



教室の壁に飾られる絵画や書



日本のお弁当を体験する授業



折り紙教室



柔道体験

#### 4. 歓迎コンサートの鑑賞

各授業参観が終わると、ホールへ案内され、児童・生徒によるコンサートを鑑賞した。ロシアのコサックダンスを演じたかと思えば、舞妓の化粧と衣装をまとって華麗な舞踊を披露し、終盤にはオリンピックの歌を合唱が行われた。中には、はっぴ風の日本の伝統的な衣装を着て、ロシアの現代的な音楽に合わせて踊る特徴的なパフォーマンスもみられた。



ロシアのペアダンス



着物と傘を使った舞踊



はっぴ風の衣装



オリンピックの歌 合唱

#### 5. 地元メディアによる取材

我々の訪問に合わせて、地元メディアの取材が入っていた。団長の真田先生がインタビューを受け、訪問の目的と感想を語った。



取材の様子

## 6. お礼の品を贈呈

コンサートの後、再び応接室に戻り、今度は我々から、用意していたお土産袋(和紙やおせんべい等)を手渡した。また、江上氏がその場で披露した書道では、「幸」の字を朱色で記し、「太陽の色のように」と好評を得た。真田団長は、2020年の東京オリンピック・パラリンピックに向けた継続的な連携、まずは筑波大学附属学校との交流を行いたいと提案し、ラリーサ校長とともに実現に向けた努力を継続することを誓った。



「幸」を手渡す

## 7. 第 15 番学校における一校一国運動を視察して

同校の取り組みは、我々の予想を超える多岐にわたるものであった。同校はスポーツ庁のサポートを受けて行われた「Hello Sochi Festival」においてアート部門で表彰を受けるなど、国内でも高い評価を受けている。筑波大学附属学校と継続的な交流を行い、2020年に東京大会での一校一国運動の展開に向けて、長野で発祥した同運動のソチにおけると空調的な取り組みを逆輸入することも検討したい。

また、ラリーサ校長は質疑応答の中で、「一校一国運動を通して、子供たちに寛容さ(tolerance)が身についたと感じる」と述べた。これは、一校一国運動を通じた各取り組みが、単に日本文化に関する知識をもたらしたことにとどまらず、児童・生徒たちに異文化、他者への理解力を促進させたことを意味しているだろう。それをもしIOCの掲げるオリンピズムの教育的価値に当てはめるとすれば、「他者への尊敬(Respect for Others)」をまさに実現した教育プログラムであるといえよう。

そして、今回の視察を通して感じたこととして、筆者の所属する筑波大学附属坂戸高校でどんな取り組みができるだろうか。本校では、生徒の個性や進路に応じて多彩な選択科目を開設し、それらを学習の目標や系統性によって四つの科目群を配置している。国際教育推進委員会が中心になり、本校独自の教科「国際社会」「Discussion & Debate」「比較文化論」「Global Studies」が既存する。その中で国際社会の理解やグローバルな視点と複眼的視野を培い、世界の人たちと協働で出来る教育を人材の育成に取り組んでいる。2年次生の「総合的な学習の時間」や選択科目「国際社会」において、ロシアの文化を知るとともに日本固有の文化や伝統を発信し、互いに理解を深めていくことが可能と考えられる。15番学校への訪問は、今後の取り組みに向けた多様なアイデアを提供してくれた。

文責・撮影:大林太朗(筑波大学)、鈴木愛梨(筑波大学附属坂戸高等学校)